

Mr. HORI-NY で活躍した松江出身の写真家・堀市郎写真展

——小泉八雲が応援した写真家——

【第四期】

堀市郎は、明治12年(1879)、現在の松江市外中原町に松江画工・堀櫟山の長男として生まれ、松江市尋常小学校卒業した。市郎をアメリカへと導いた人物に小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)がいる。市郎は、八雲が最良にした殿町の写真師・森田禮造の許で修行し、八雲の美保関旅行にも同行した。旅行の5か月後、市郎は上京し、東京で孤独な生活をしていた八雲宅を度々訪れた。アメリカでジャーナリストとして活躍した八雲との交流は、市郎にとり、その国情を知り、本場での写真研究を目指す動機づけとなった。

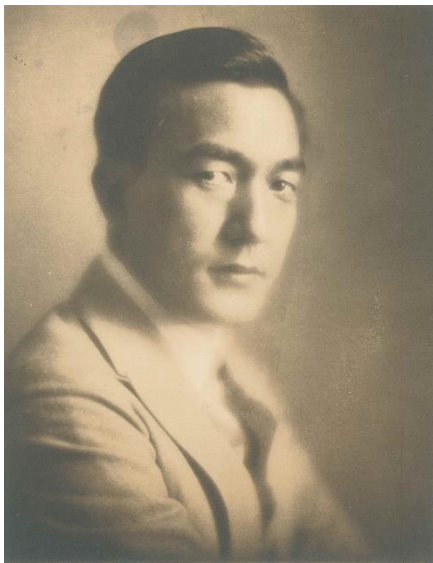
1901年(明治34)、22歳の市郎は単身渡米する。ニューヨークで成功し、「写真の開拓者」と言われた。動きのある写真で評価され、「ブロードウェイで上演される役者のポスターが、ミスター堀のものでなかったら一流でない」とすら言われた。また、無声映画時代の国際的ハリウッドスター早川雪洲や、蝶々夫人で有名な三浦環、バレリーナのアンナ・パブロアやモダンダンスの祖イザドラ・ダンカンなどの役者、日露戦争でバルチック艦隊を破った東郷平八郎などの写真を撮影した。

市郎が住んだニューヨークのアパートの隣室に、野口英世夫妻が住み、英世が患者の脳から梅毒スピロヘータを発見した際には、深夜にもかかわらず市郎の部屋へ真っ先に知らせに訪れた。市郎は英世を理解する親友で、英世に将棋や油絵を教えた。1969年没。



堀市郎肖像写真
(佐々木寛子氏提供)

【堀市郎撮影 展示写真および解説】



①ハリウッド初期
無声映画時代の国際的大スター
早川 雪洲



②ミスターホリの写真には
ムーブがある
「ヘンゼルとグレーテル」

(①～⑤ 佐野好作氏蔵)
【裏面へつづく】

① ハリウッド初期 無声映画時代の国際的大スター 早川雪洲

早川雪洲は初期ハリウッド映画の大スターで、1923年にハリウッドを去ってニューヨークへ行き、ブロードウェイを中心に活躍した。雪洲は市郎の部屋を訪ねた際に、隣室の野口英世と面識を持った。その時の茶飲話に、雪洲が「南京虫に噛まれた時の薬は無いか」と英世に尋ねたが、「南京虫のことはよくわかりませんね」と言われ大笑いとなった。英世は「あなたは血が非常に清潔過ぎるのだ。少し南京虫の毒でも注射して免疫性にしたらどうです。それしか手はないですよ」と言って雪洲を慰めてくれたと、雪洲は自伝に記している。代表作として、「戦場にかける橋」(1957年)に登場する日本軍の収容所所長の斉藤大佐や、日露戦争を描いたフランス映画「ラ・バタイユ」(1923年)の東郷平八郎元帥などがある。1886年生—1973年没。ニューヨークにて市郎撮影。

② ミスターホリの写真にはムーブがある「ヘンゼルとグレーテル」

ニューヨーク・ブロードウェイのバレエダンサー集団であるアンナ・パヴロワバレエ団の団員が、市郎のためにとったポーズ。人々から、「ミスターホリの写真にはムーブがある。停止している瞬間なのに動きがある」と言われた。動きの一瞬を巧みに捉えることに長けた点が評価された。この動きが感じ取れる写真技術は、市郎の写真修行の到達点といえる。ニューヨークにて市郎撮影。



③ 役者



④ 習作



⑤ 早川雪洲

③ 「ブロードウェイで上演される役者のポスターがミスター堀のものでなかったら一流でない」

市郎の写真の特徴は、ポートレートの中に、邪魔者が一切入らず、非常にきれいな点にある。無駄がなく、画面内の空気がきれいで、背景がすっきりしている。市郎の撮影技術と修正技巧が、依頼者を満足させた。また1920年代、市郎は米国で最も洗練された写真焼付を行う人物として知られ、暗室技術の模範となった。米国の写真会社は試験焼付のために新しい印画紙のサンプルを送っていた。ブロードウェイの役者／ニューヨークにて市郎撮影。

④ アメリカから寄稿し『アサヒカメラ』の表紙を飾った習作

市郎がニューヨークで撮影した役者のポートレートである。この写真は、ニューヨークから日本の写真雑誌『アサヒカメラ』に「STUDY／習作」として寄稿し、同誌1927年10月号の表紙になった。同月号には、鳥取県赤崎の芸術写真家・塩谷定好の「海辺小景」が月例懸賞入選作品(一等)として掲載されていて、山陰出身の写真家たちの活躍がうかがえる。この時、市郎は48歳、定好は28歳であった。定好にとって、共に山陰を郷里とし、写真を芸術として表現しようとした市郎の、世界での活躍はどのように映っていたのであろうか。

⑤ 早川雪洲

早川雪洲の妻は、無声映画時代にアメリカで活躍した日本出身の国際女優・青木鶴子(1892—1961)である。夫婦ともにスターで、日本人女性初のハリウッド映画主演をつとめた。鶴子の叔父は明治時代、オペケペー節で売り出し、一座を妻の貞奴とともに率い、日本近代演劇の開拓に貢献した川上音二郎である。鶴子は、音二郎の欧米巡業で子役としてデビューしたが、アメリカに置き去りにされた。ニューヨークにて市郎撮影。

[参考出陳] 市郎自らが語る写真論「余の写真に就て」(『アサヒグラフ』1927年7月号)

市郎自身が語る写真論からは、市郎が写真を芸術の域に高めようと努力していたことがうかがわれる。絵画を学び、自らの意思を盛り込む方法を考えた。そして、ついに舞踊のなかに人間美を見出したのである。